

10年の節目を機にブレークスルーへの挑戦を期待

初代学部長 村上 征勝（文化計量研究室）



新学部発足と「私の学生」を持てた 二重の喜び

私は文部科学省所管の統計数理研究所で、30年間データ解析に携わってきました。いわゆる「理系」の仕事に携わることが多かったのですが、ある時、「文系」の分野においてデータ解析が全く手つかずであることに気づき、文章分析を始めたのです。日蓮遺文や源氏物語、井原西鶴の作品などをデータベース化して分析しようと考えていた矢先に同志社大学から新設する文化情報学部への着任のお話をいただきました。そこならこの研究を引き続きできると考えて、喜んで引き受けました。私は北海道生まれなのですが、広々とした京田辺キャンパスがすっかり気に入ったのも大きな動機の一つ。東京からこちらに単身赴任し、開設の前年から設置準備室の一員となりました。

設置準備室時代の大きな仕事は、高校訪問や記念講演会など受験生やその父母、高校の先生方などに新しい学部の周知徹底を図る行事や催しでした。苦勞の甲斐あって、幸い初年度から新学部挑戦するぞというチャレンジ精神にあふれた学生がたくさん入学してくれました。また、約30人の教員は私を含め半分は外部からの採用でしたが、未知の学部運営に挑む意欲と情熱にあふれた先生方ばかりでした。私にとっては、皆の努力が

実って新学部が無事発足でき、また研究職時代にはなかった「私自身の学生たち」を持てたことが二重の喜びでした。

開設4年目で 文科省のGP認定受ける

開設当初も新学部のPRは、大変重要な仕事でした。初代学部長として、同志社大学の文化情報学部ができたことを広く知ってもらうためにどう情報発信していくかに腐心しました。先生方には積極的にマスコミに出てくださいとお願いしました。新聞の略歴やテレビのテロップで「同志社大学教授」としかないようなケースがありますが、私は必ず「同志社大学文化情報学部教授」としてもらってくださいと繰り返し申し上げました。

開設4年目に文化情報学部が、教育の質向上に向けた大学教育改革の取り組みを認定する文部科学省のGP（Good Practice／優れた取組）に選ばれました。時期尚早という声もあったのですが、思い切って応募してみたのです。私たちはわずか4年で頑張れば評価されるということを自ら挑戦し、証明したのです。

授業では、京都をはじめとする伝統文化を代表する第一人者を講師に招くトピックスという講義を初年度から始めました。華道や茶道の家元、香や京菓子の老舗などそれぞれの分野のトップに来ていただき、じっくりお話を聞かせていただきました。学生たちが直接、京都の文化や文化人に接する大変いい機会となりました。

開設当初の文化情報学部の定員は250人と小所帯でしたので、学生と教職員の距離がとても近い学部としてスタートし、その密接な関係は今も変わっていません。全学年をそれぞれ15人から20人に区分けして教員一人ひとりが担当するア

ドバイザー・クラス制度も初年度から始めました。勉強や就職だけにとらわれず、いい友達がたくさんできて、見聞が広められるように1、2年生はノンアルコールで、3、4年生は飲み会も活発に開きました。アドバイザー・クラスの学生たちが私の誕生日にサプライズパーティーを開いてくれたことも忘れられない思い出です。

任期最終年度に 定員280人に増員実現

私は4年生までがすべてそろそろ2008年度までの4年間、学部長を務めました。文化情報学部は追加合格者を出しませんので、毎年入学者数が確定する入学式までは胃が痛くなるような思いをしました。しかし、定員割れのような事態は起こらず、優秀な学生がたくさん入学してくれました。逆に4年目には定員を30人増やして、280人にすることができたのです。新学部の魅力もさることながら、その背景には同志社大学の歴史と伝統、同志社ブランドの重みがあったからだと思います。

開設から10年が経過して、認知度もさらに高まり、学部運営も安定してきていると思います。ただ安定してくると、思いきった施策や一見無茶なことはなかなかできなくなります。私は10年目の大きな節目を迎えた文化情報学部が思い切ってブレークスルーに挑戦することを期待しています。



10周年記念企画

歴代学部長が語る

文理に明るいOB・OGが文化情報の価値を高める

第2代学部長 川崎 廣吉（数理モデル研究室）

教務主任として
初代学部長を補佐

私は2009年4月から村上先生の後任として1期2年、学部長を務めました。新学部創設から5年目に入って、すでに1期生を卒業生として社会に送り出し、1年生から4年生までがすべてそろって、ようやく学部としての体裁が整ってきた時期でした。私に大役が回ってきたのは、村上初代学部長のもとで教務主任を務め、大学や学部の運営に携わっていたからだと思います。

私はもともと、京都大学大学院理学研究科で生物物理学を専攻し、同志社大学理工学研究所（現ハリス理化学研究所）で13年間研究者として歩んできました。その後、教授として工学部知識工学科（現インテリジェント情報工学科）に移籍し、2005年の文化情報学部発足と共に当学部に移籍しました。

創設当初から文理融合を掲げてスタートした新しい学部でしたので、文系と理系の先生方が分離せずに、うまく融合し、一緒になって文化事象をデータサイエンスで解析できるような学生を育てることが大きな課題でした。とはいえ、それぞれの先生方は各分野で実績を挙げてこられた方ばかりですので、先生方自身を変えることはできません。そこで「プロジェクト」という科目を設けて、

文理の教員と一緒に授業を行うことで、文理両方の視点から新しいテーマに迫る授業をスタートさせました。これが今の「ジョイント・リサーチ」の原点です。

柔軟で斬新な事象を見る 学生たちの目

私自身の専門である数理生物学は、生物現象を微分方程式などで表し、それを解析するものです。具体的には、稲の害虫であるイネミズゾウムシや松枯れ現象の原因になるマツノザイセンチュウを媒介するカミキリムシがどのように分布拡大し、伝播するのかを偏微分方程式や積分差分方程式を使い、数学的解析や計算機シミュレーションを用いて解明してきました。

理科系の私は、プロジェクトでは古典文学の研究者である福田智子准教授と組んで、古典和歌のテキストデータをコンピュータ解析する授業に取り組みました。福田先生は古典の膨大なテキストデータを対象にコンピュータを用いた解析を進めておられたので、授業では和歌のデータベースを対象に学生たちと一緒にどういう言葉が5-7-5-7-7のどの位置に使われやすいかや、言葉の組み合わせパターンなどを分析しました。和歌になじみのある学生もそうでない学生もそういうやり方で和歌と接するのは全く初めての体験だったので、とても刺激的で興味深い講義になったように思います。

また、私のゼミでは映画がヒットする現象と興行収入の関係とその変化を微分方程式などの数理的手法で解析する研究に取り組んだ学生がいます。また、居酒屋の飲み物の値段と最寄り駅の乗降客数との関連性について研究した学生もいました。この学生によると、大阪市の環状線の全19駅について調べたところ、駅との距離が数100

メートル以内だと駅の乗客数に比例して高くなることが分かったそうです。学生たちの現象を見る目は、実に柔軟で斬新であり、いつも驚かされることばかりです。

文理融合のたゆみない努力を継続

文化情報学部がスタートしてから10年の月日が経過しましたが、文理融合がうまく機能するために、教員サイドは開設当初からかなりしんどい努力を続けてきたように思います。自分の専門領域を広げる形で、違う要素を取り入れながら新たな講義を続けてきたからです。先ほど教員を変えることはできませんと申しましたが、そうした努力の中から実際に文理の両方をこなす先生も出てこられました。当然ですが、今後もそうした努力を続けることが求められます。

文化情報学部の知名度はまだまだだとは思いますが、毎年、他学部に引けを取らない優秀な学生たちが入学してくれています。また、高校側にも次第に理解が深まり、100校近い指定校からも意識の高い学生たちの推薦をいただいています。これらの中から文系の直感力の鋭い視点と理系の科学的な基盤の上でじっくりと物事を考える視点を併せ持つような学生を私たちが一生懸命育てていく。そして、それら文理の両面に明るい学生が実社会で活躍することで、文化情報部の社会的価値がより高まるのだと考えています。



10周年記念企画

歴代学部長が語る

研究業績の発信で、教学組織としての充実を

第3代学部長 田口 哲也（比較文化研究室）

新学部の論議を重ね、
「文理融合の夢の学部をつくろう」

私は2011年4月から2期4年、第3代学部長を務めました。京田辺キャンパスに新学部を設立しようという論議はもともと、2000年ごろから数人の構想委員会で始まり、それが設置準備委員会、設置準備室へと発展していきました。

私は構想委員会からのメンバーで、21世紀に向けた同志社大学の教育戦略としてどういうウィングを広げていくか、既存の6学部とはどこがどう決定的に違う新学部とするかについて論議してきました。構想委員会の会議だけでも70回くらい開きました。そこで、「文理融合の夢の学部をつくろう」というアイデアが出たのです。

今でこそ文理融合はトレンドかもしれませんが、当時は文系と理系は水と油も同様に、文理を統合したような学部はあり得ないというのが大半の受け止め方でした。

従来にない学部をつくらないと意味がないと私たちは考えていたのですが、それとは裏腹に、私が学部長になる頃まで文化情報学部というところは何をやっているのかよく分からないという目で見られていたように思います。

異分野の協働で、 相互理解が深まる

新学部発足時は、教員も職員もみんな一生懸命でした。一から自分たちで創り上げたわけですからね。当時の職員の一部が4月の入学式に入学手続を行った254人が出席したのを見て「本当に入学してくれた!!」と驚いていたエピソードがありますが、みんな同じような感慨というか、達成感を感じていたのではないのでしょうか。私は講義や演習の準備や会議に忙しく、ゆっくり感慨に浸っている余裕はありませんでした。でも、1期生254人の名前は今でもほとんど覚えていますから、やはり強烈な印象だったのだと思います。

25人いる教員は、専門がすべて異なりました。また、さまざまな分野の中で学問的な規律や性格もすべて違いました。共通項をどう見出すか、相当時間をかけて論議しました。特に文系と理系では研究の仕方も教育の仕方も相当異なっています。私たちの学部は複数担当の科目が結構多いのですが、これがまず今までの学部にはないものでした。私の場合は2年生、3年生の演習プログラムがあり、それを文系2名、理系2名の教員が毎回複数で担当するのです。大変でしたが、結果的に相互理解が深まり、よかったと思っています。

学部長になったのは順番が巡ってきただけのことですが、私自身は、2期4年は長すぎたと考えています。2年ごとに交代して、教員全員が学部長を経験し、学部運営の主体になるのがいいでしょう。個人的な考えで学部の方向が変わるのではなく、誰がやってもうまくいく仕組みをつくる必要があります。文化情報学部は教育熱心な教員が多いですし、教育についてはそれなりの自負をそれぞれの先生方がお持ちです。ただ、やはり大学は研究機関ですので、研究業績を社会に発信し

ていく力がないと、持続的な教学組織としては生き残れない。その割には先生方が抱えている業務があまりに多く、負担が大きいのです。学部長として一番念頭に置いていたのは、教員のこうした負担を減らして、研究に専念できる時間を増やしたいということでした。

共同作業で鍛えた卒業生が 就職先で活躍

10年間の経過しましたが、最大の思い出といえば琵琶湖畔のリトリートセンターで開いていた卒業研究の発表合宿です。ゼミ生全員が泊まり込みで1人1時間程度、自分の卒業研究の発表をするのですが、それがうまくいき、そこから論文をまとめ上げ、試問会で全員が合格するというのが教員としての達成感が一番大きい出来事でした。

卒業生の就職先はメーカーや金融、流通の他、メディア、IT系企業など多彩です。最近の学生は共同作業やコミュニティづくりが苦手な人が多いようですが、文化情報学部の学生は講義でのグループワークで鍛えられています。フロアリーダーやグループリーダーとして活躍してくれている人たちがたくさんいます。毎年開かれる企業の人事担当者の方々との懇談会の場でも、卒業生たちの評価が高く、喜んでいます。



10周年記念企画

歴代学部長が語る

同志社にとって、文化情報学部にとって、
何がベストかを常に意識しながら

第4代学部長 山内 信幸（言語記述研究室）

相互の領域を尊重し、
安定軌道に乗せたい

私は2015年4月に4代目の学部長に就任しました。同志社大学文学部英文学科を卒業、同大学院文学研究科を修了後、新島学園女子短期大学(当時)で教員生活をスタートいたしました。その後、1989年に同志社大学経済学部所属の英語担当の教員となり、改組で言語文化教育研究センターに移り、文化情報学部ができた年に学内移籍しました。アメリカ研究所長や日本語・日本文化教育センター所長、国際センター所長など計12年間、大学執行部の役職を務めました。

発足当初は、「文化情報」という名前もコンセプトもこれまでにない新しいものでした。そうした環境の中で、カルチャーも、バックボーンも異なる文系と理系の先生方が、前例にとらわれず、一つずつ積み上げるように文化情報学部のあり方、ルールを決めていきました。当初は、「文理融合」のキーワードを標榜していながらも、文系はデータで本質に迫るのが苦手だったり、理系はコンテンツへの理解が不足していたり、文理融合の共通理解にはかなり時間がかかったと思います。

この10年間は3人の前任学部長の下で、文系と理系が異なるカルチャーをぶつけ合いながら、学内外に文化情報学部がいかに魅力ある学部かを

情報発信することに努めてきた時期だったと思います。これからは、肩に力が入ったところを少し緩め、若い先生方の意見も聞きながら、学部運営を進めていきたいと思っています。多種多様な文理の領域を尊重しながら、安定軌道に乗せることが責務の一つと考えています。

文理の資質備えた ゼネラリストを送り出す

入学してくる学生たちは、偏差値を見ても、他学部に比べて見劣りするという事もなく、優秀な学生がたくさんいると思います。受験時に文系・理系で試験科目が違うのですが、全体的には文系の学生が多く、女子学生もたくさんいます。文化情報学部は学生と教員の距離が学内で最も近い学部の一つですので、そうした環境の中で学生一人ひとりが文化を理解し、データサイエンスが使える文理融合の資質を持ったゼネラリストとして卒業し、社会で活躍してくれることを願っています。

私がゼミの説明会やゼミ訪問の時にいうのは、「ことばに関わる研究領域でやりたいことをやりなさい」「卒業してもつながりが持てるような運命共同体的なゼミにしよう」ということです。そして、ゼミに入る時には、自分の言葉で、楽しい時に喜びを分かち合い、苦しい時に励まし合う決意を語ってもらうことにしています。学生たちの入学式の時の緊張した顔、卒業式の晴れやかな顔を毎年見ることができるこんな素晴らしい職業に就けたことを誇りに思い、喜びに感じています。

次の10年に向けて、 グローバル化など推進

次の10年に向けた取り組みとして、一つは、自己点検評価委員会でカリキュラムの見直しを進

めてもらっています。現在は、言語とか文化とかのコース制は採っていませんが、入学した時に4年後の自分の姿を「見える化」して、卒業研究につながるような指針を提示することは必要です。もう一つは、大学全体で取り組んでいるグローバル化の一環として、北京大学（中国）、高麗大学（韓国）、ニューオリンズ大学（米国）、カールスルーエ工科大学（ドイツ）など5カ国・地域の9大学との学部間連携を実質化・本格化させていきます。学生たちには、留学を通じて得難い経験を積み、グローバルな資質も身につけてもらいたいと願っています。

これまでの大学執行部経験の中でも感じてきたことですが、学部長になって「同志社にとって、文化情報学部にとって、何がベストか」をより考えるようになりました。マンパワーと情報を結集して、同志社のために、文化情報学部のために、いかに尽力できるかに腐心しています。学部長になったことで研究者としての時間には制約ができましたが、やりがいを感じながら学部長の仕事を務めています。

10月31日には、クローバー祭の一環として設立10周年記念行事が開催され、講演会や音楽会、パネルディスカッションなど多彩な行事が開かれました。学部長としてこうした仕事に携われるのは、たいへん有り難く、名誉なことです。心から感謝しています。

